

史跡 生目古墳群

—保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅲ—



2002

宮崎市教育委員会

序

史跡生目古墳群、この古墳群は昭和18年に国の指定を受けましたが、今日に至るまで多くの古墳が消滅、崩壊を受けてきました。現在もなお1号墳や22号墳などの多くの古墳ではその爪痕が残されております。宮崎市では市制70周年記念事業の一環として、崩壊の進んだ古墳も含め、これらわたしたちの大切な文化財を復元、保存整備し、市民の皆様に歴史を身近なものとして感じていただける場となるよう、現在、生目古墳群史跡公園整備事業を進めております。

本書は平成12年度に行われた第3次調査の概要報告書であります。12年度は5号墳を中心に旧14号墳、7号墳の調査を行いました。5号墳、7号墳では良好な状態で周溝が確認され、埴輪を始めとする遺物も出土量が増え、古墳の年代も徐々に明らかになりつつあります。また、新たに2基の地下式横穴墓も確認され生目古墳群では合計16基となりました。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、ご協力いただきました関係機関の皆様、ご指導、ご助言を賜りました諸先生方、発掘調査に従事された作業員の方々に心から感謝申し上げます。

宮崎市教育委員会

教育長 内藤泰夫

例　　言

1. 本書は史跡生日古墳群保存整備事業に伴う平成12年度発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は宮崎市教育委員会が平成12年12月13日～平成13年3月31日までの期間実施した。
3. 発掘調査により出土した遺物及び調査における図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管する。
4. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

文化振興課	課長	野間 重孝（12年度）	小掠 勝（13年度）
	課長補佐	小掠 勝（12年度）	嶋本 功（13年度）
文化財係	係長	永井 淳生	
調査事務	主事	竹野 隆司	
調査員	主査	田村 泰彦	
"	技師	稻岡 洋道	
"	"	宇田川美和	
補助員	嘱託	椎 由美子	
"	"	熊田原 被義（13年度）	
"	"	佐藤 小夜子（"）	

5. 本書の執筆・編集は稻岡が行った。
6. 掲載した図面の実測・製図・図版の作成は稻岡・椎・熊田原・佐藤が分担して行った。
7. 掲載した墳丘測量図は宮崎大学考古学研究室が作成し、旧14号墳には一部加筆した。
8. 現場及び遺物写真撮影は稻岡・田村が分担して行った。空中撮影は、有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
9. 自然科学分析は株式会社古環境研究所に委託した。

本　　目　　次

第Ⅰ章 生目古墳群の概要 1	第Ⅳ章 5号墳の調査 10
1. 調査に至る経緯 1	1. 平成10・11年度の調査の状況 10
2. 古墳群の立地と現状 1	2. 平成12年度の調査結果 11
	3. まとめ 14
第Ⅱ章 旧14号墳の調査 7	第Ⅳ章 7号墳の調査 19
1. 古墳の概要と平成10年度の調査の状況 7	1. 古墳の概要と平成11年度の調査の状況 19
2. 平成12年度の調査結果 7	2. 平成12年度の調査結果 19
3. まとめ 9	3. まとめ 21

第Ⅰ章 生目古墳群の概要

1.調査に至る経緯

生目古墳群は昭和18年9月8日に国の指定を受けた。指定当時は前方後円墳7基、円墳36基の計43基の古墳が存在したが、昭和36~38年にかけて行われた上ノ迫土地改良事業により、一部の古墳が削平され、消滅及び形状が変化した。また改良事業中の昭和37年には古墳標石、道標石、説明版の設置等の整備が行われている。

昭和50、51年には国庫補助事業で、航空測量による地形図及び『生目古墳群保存管理計画策定書』が作成され、昭和57年には古墳群約14haを対象とした境界点測量を実施している。

平成5年には「みやざき市制70周年記念事業」の一環として(仮称)宮崎市総合スポーツ公園並びに生目史跡公園建設事業が取り上げられ、平成5~7年度にかけて国庫補助事業で、生目古墳群周辺遺跡発掘調査を実施した。

平成8年7月には委員15名より構成される生目古墳群史跡公園整備委員会が発足、基本構想・基本計画策定にあたり、計5回の委員会を開催、平成9年度末に『生目古墳群史跡公園整備基本構想・基本計画報告書』をまとめた。

平成9年度からは土地の公有化を開始、9、10年度には丘陵南東部に立地する石ノ迫第2遺跡の調査を実施し、平成10年度には国庫補助を受けて史跡整備に伴う発掘調査を3~6号墳、旧14号墳より開始した。

2.古墳群の立地と現状

生目古墳群は大淀川下流右岸、宮崎市跡江地区に位置する東西約1.2km、南北約1.2kmの長靴の形を呈した丘陵上に立地している。丘陵上は東側からは宮崎市街地が一望でき、西側からは晴れた日には霧島連山を遠望できる。丘陵は北西側と南西側では形状が異なっており、北西側は最高点44.4mを測る急峻で複雑な地形を呈しており、南側には枝状に小丘陵が伸び、丘陵間の開析谷には溜池が造られている。南東側は標高25~30mの比較的平坦な地形を呈しており、古墳群の大半はその南東側の丘陵に立地する。丘陵全域は照葉樹林地でシイ、カシ林となっており、それらに混ざってスギが植林され、一部に竹林がみられる。また古墳群が所在する周辺は事業開始前は畑地、ココスヤシの苗圃として利用されていた。

古墳群は現在跡江丘陵上に前方後円墳7基、円墳20基、丘陵下に2基の計29基の高塚古墳が所在し、その他、発掘調査等により確認された円墳7基、横穴墓9基、地下式横穴墓14基により構成される。丘陵上に造営された高塚古墳及び地下式横穴墓のうち、1、2、旧2~4号墳、地下式横穴墓の6基は、跡江丘陵北側に谷を挟んで対峙する独立丘陵(最高点37m)に立地する。また横穴墓は、1号墳前方部南側側面に5基、3号墳後円部西側の崖裾に4基構築されている。跡江丘陵下には2基の円墳が微高地上に立地している。また、現古墳番号は1~23号(20号は欠番)までの22基の古墳にのみ付してあり、指定時の番号とは異なる。

古墳群の史跡指定以前の資料としては、昭和16年に原田仁により100m級の大型前方後円墳である1・3・22号墳の実測図が作成されており、また地元には戦前に作成された古墳案内略図(徳地一作図)が存在し、この絵図には台地上に前方後円墳8基、円墳30基が記されている。

昭和49年には、前年に破壊された3号墳後円部西側の4基の横穴墓の追跡調査が行われ、須恵器、土師器、貝釧、耳環、馬具類(轡、貝製雲珠)、鉄鏃、刀子等が出土した。

昭和58年には丘陵下の城平地区に所在する41号墳の確認調査を実施。調査の結果、径5m、高さ1.5mの円墳であることが確認され、幅50cmの周溝が巡ることも確認された。

平成5~7年の生目古墳群周辺遺跡発掘調査では、前方後円墳である5・14・22号墳周囲の調査で墳丘から転落した葺石が検出され、22号墳前方部西側裾からは、壺形埴輪片が出土した。また、所在不明となっていた旧2~4号墳、旧15号墳周囲の調査を行い、その位置を確認した。その他、地下式横穴墓が8基、土坑墓が6基検出されている。弥生時代の遺構としては、13号墳南側、17号墳西側から円形周溝墓が検出され、丘陵東南部の畠地西側斜面からは弥生時代中期のV字溝が検出され、環濠集落の存在が確認された。

平成8年には宮崎大学考古学研究室により3・5・7・14・22・23号墳の前方後円墳6基とその周辺の円墳の詳細な墳丘測量図が作成された。

平成9・10年には石ノ迫第2遺跡の調査が行われ、この調査は平成7年度に確認された環濠集落の環濠内側の居住域に該当する。結果、弥生時代中期と後期後葉の集落が確認され、竪穴住居35軒、竪穴状遺構20基、土坑33基が検出され、集落廃絶後には土坑墓43基が構築される。また、墳丘削平により所在不明となっていた国指定旧39・40号墳の周溝を確認した他、新たに中期から後期にかけての円墳4基が検出され、うち3基は地下式横穴墓を埋葬主体としていた。地下式横穴墓は計5基が検出されている。

平成10年度からは整備に伴う発掘調査を開始し、3~7、旧14号墳の各所にトレンチを設定した。調査の結果、3号墳で良好な状態で葺石が検出された他、3号墳東側周堤の外側で地下式横穴墓が、5号墳西側周堤で土坑墓が検出されている。



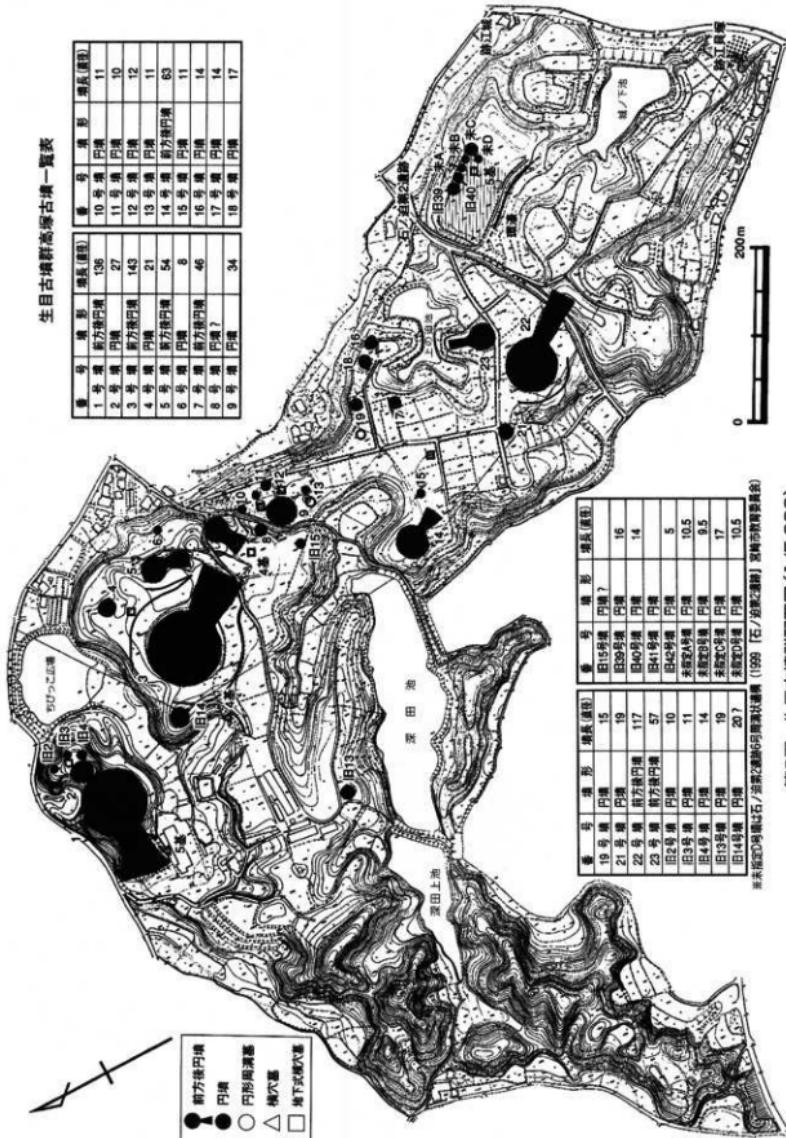
図版1 生目古墳群全景(南西上空から)



第1図 生目古墳群位置図 (1/100,000)

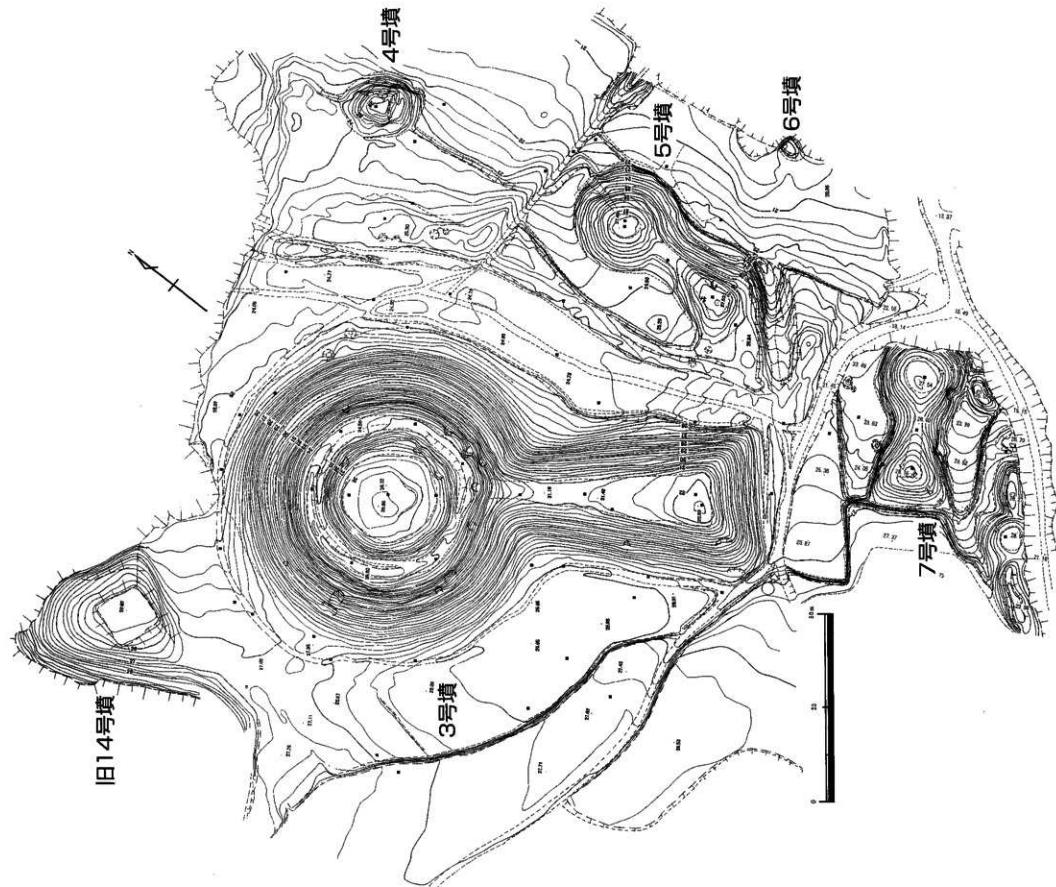
生目古墳群高尾古墳一覧表

番号	墳形	埋長(直径)	番号	墳形	埋長(直径)
1号墳	前方後円墳	136	10号墳	円墳	11
2号墳	円墳	27	11号墳	円墳	10
3号墳	前方後円墳	143	12号墳	円墳	12
4号墳	円墳	21	13号墳	円墳	11
5号墳	前方後円墳	54	14号墳	前方後円墳	63
6号墳	円墳	8	15号墳	円墳	11
7号墳	前方後円墳	46	16号墳	円墳	14
8号墳	円墳?	34	17号墳	円墳	14
9号墳	円墳	17			



第2図 生目古墳群配図図 (1/5,000)

第3圖 生目古墳群3号墳周辺図(1/1,000)



1.古墳の概要と平成10年度の調査の状況

3号墳の周溝を挟んだ北西側、丘陵が岬状に突出した部分に位置し、三方は急崖となる。古墳は円墳として指定されているが、新番号は付されていない。墳頂部には、かつて高圧鉄塔が建っており、頂部は削平されているが、現在約2.0mの古墳状の高まりが残る。墳丘上にはコジイ、アラカシ、サカキ、マテバシイ、エノキが少數見られる。

10年度の調査は古墳であるか否かの確認のため、頂部及び斜面に3箇所の調査区を設定した。調査の結果014A・レンチでは墳頂部から幅0.6mの墓坑が検出され、墳頂部北端付近からは土師器の高杯、壺の口縁部が出土した。また、トレチの北端では、西側からなだらかに屈曲して北側の斜面に向かって伸びる幅70cm、深さ20~30cmを測る溝状遺構が検出された。墳丘は土層観察から墳端付近はアカホヤ火山灰土、墳頂付近では黒色土の削り出しによって築造され、盛土は確認されなかつた。墳頂からの土坑の検出、付近から供獻土器と思われる高杯の出土により、古墳である確証を得た。また、トレチ北端で検出された溝状遺構が古墳周溝であるならば径26m程度の円墳に造出を有する可能性もある。



図版2 旧14号墳(東から)

2.平成12年度の調査結果

今回の調査は10年度に確認された古墳北側の溝状遺構の構築時期、墳形を確認するために古墳北側、東側に計4本のトレチを設定した。

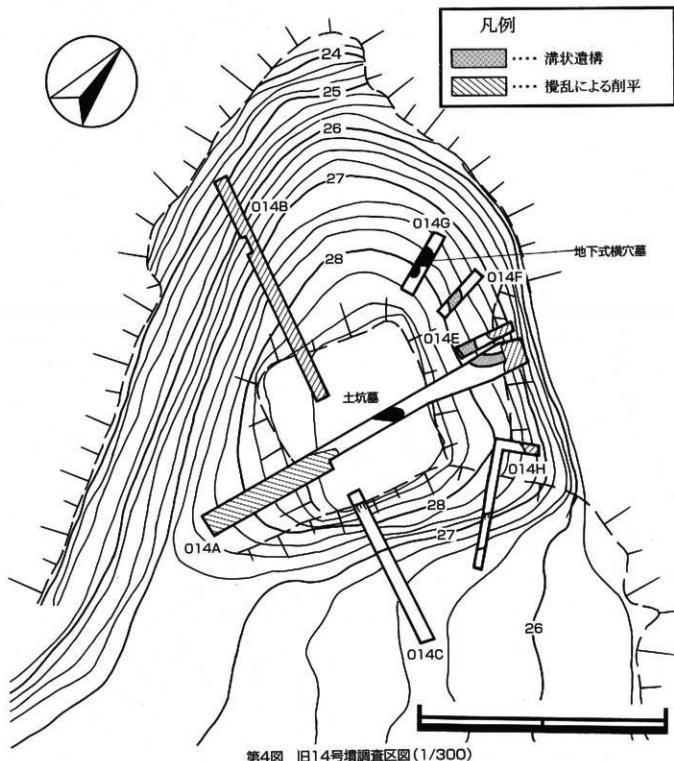
014E~014Gは平成10年度調査の014Aで検出された溝状遺構の巡方向確認のために設定した。調査の結果、3トレチすべてにおいて、溝が確認された。014Eは幅1.2m、深さ50cm、014Dは幅1.0m、深さ20cmを測る。溝はコンターラインに平行に巡る。また、014Fでは溝はトレチ東壁付近の一部でしか確認できず、溝を切って竪坑を持ち、墳丘に向かって玄室を持つ地下式横穴墓が検出された。トレチ西側には巨木があり、危険防止のため、今回は遺構の約半分しか検出されなかつたため不明な点も多い。現況



図版3 014E(東から)

では堅坑の深さは50cmを測り、羨道部分は玄室に向かって大きく下る。玄室はすでに天井が崩落しているが、平入りを採用していると考えられる。遺物は出土していない。

014Hは10年度検出の溝状造構が屈曲しているため、造出付円墳の可能性が考えられたため、正否を確認するために設定した。トレンチは3号墳方向、北側谷方向にし字に設定した。北側谷方向では古墳に伴うものと考えられる成形は認められなかった。3号墳方向では平坦な地山がL字角から約6.3m続いた後、その後、3号墳に向かって傾斜角20°で下る盛土が確認された。盛土はシラス土、黒色土によって形成される。遺物は出土していない。





図版4 014F(北から)



図版5 014F 溝状遺構



図版6 014G(西から)



図版7 014H3 号墳側(東から)

3.まとめ

今回の調査では、北西側に設定した3本のトレンチで前回調査で確認された溝状遺構が検出された。この溝状遺構は前回の調査においても確認はされたもののその性格については明らかになっていたなかった。この溝状遺構はスコリアの混入する層にバックされ検出した。このスコリアは自然科学分析により10~13世紀に霧島火山から噴出した霧島高原スコリアと判明し、それ以前の構築が考えられる。また一番西に設定した014Gでは溝状遺構を切って地下式横穴墓の堅坑が構築されていた。そのため、この溝状遺構は古墳周溝の可能性が高くなった。墳丘北東側に設定した014Hでは盛土が確認された。この盛土は土層観察から3号墳周溝に覆土を行っているため、3号墳築造後に旧14号墳構築の際に墳丘の形成として行ったものと考えられる。しかし、盛土の墳端のラインや、今回の北側に集中して設定した調査結果、また前回の調査結果を踏まえても墳形、規模については明らかにすることはできなかった。今後、旧14号墳については更なる調査が必要と考えられる。

第Ⅲ章 5号墳の調査

1.古墳の概要と平成10・11年度の調査の状況

3号墳前方部東側、丘陵東側縁辺部に位置する前方後円墳である。古墳の東側は開墾により削平され、特に前方部隅角は著しい。規模は、現状で墳長54m、後円部径29m、高さ4.4m、前方部幅24m、高さ4.5m、前方部長26m、くびれ部幅12mを測る。墳丘の北側から西側にかけては、幅8m程度の周溝が巡り、その外側には西側のみ周堤状の高まりが確認できる。

これまでの調査は、後円部北東側約1/6とくびれ部両側を面的に調査した他、墳丘周囲と西側周溝、周堤にかけてトレンチを設定している。

後円部北東側約1/6に後円部築造状態確認と周溝の形態確認のために面的に調査した5I区は、後円部が2段築成であることが確認された。葺石は残存するもののくびれ部に残存する葺石と比較すると散在的な印象を受ける。また標高24.5m付近でテラスが巡る。墳端はトレンチ西半分で検出されたが、古墳構築後に墳端に平行に巡る溝や、昭和38年に建てられた古墳標石によって、確認できたのは僅かである。また、墳端と同じ範囲で地山整形による基壇が確認され、基底部幅2.0m、高さ0.3mを測る。周溝部分は北側で東西に走る高原スコリア混入土を埋土とする道路状遺構が検出され、同埋土の溝状遺構が周溝部分を斜めに横切って道路状遺構に合流する。また、トレンチ東側では最大幅8.7m、最大深85cmのやはり高原スコリア混入土を埋土とする土坑が検出され、墳丘、周溝を大きく削っている。遺物、柱穴は確認されなかった。

5I区においては墳頂平坦面、墳丘面で埴輪片が多数出土しており、二段目に分布が集中していることから、墳頂部からの転落と考えられる。後円部にはこの他、主軸に直行する墳丘中位から墳端にかけて西側に5H-1、東側に5Jを、後円部北西部の墳端付近に5Kを設定した。5H-1においては根石はみられないものの墳端が確認されたが、5K、5Jでは確認されなかった。5H-1、5Jでも傾斜変換が見られることから、2段築成であることを確認した。また5Jでは二段目下位の覆土内から、やや大きめの最終調整がナデで、スカシ孔、突帯を持たない円筒埴輪片が出土している。

東側くびれ部の墳頂から墳端にかけて設定した5Cでは、前方部東側は2段築成であることが確認された。標高24.5m付近でテラスが巡る。一段目は葺石、根石の石列が良好に残存するものの、二段目は状態が悪く根石も見られなかった。遺物は埴輪片が転落した葺石に混ざり数点出土している。西側くびれ部の墳頂から墳端にかけて設定した5Gでは葺石が良好な状態で確認され、葺石の区画が確認された。また周溝、周堤の調査も併せて行い、墳端付近から土師器の壺が出土している。また西側周堤上からは主軸方向を南北に持ち、2段に掘られる土坑墓を確認、刀子が出土している。



図版B 5号墳(南東から)

前方部東側に墳頂から墳端にかけて設定した5Dでは5C同様、前方部が2段築成であることが確認され、標高24.5m付近でテラスが巡ることが確認された。墳頂付近では一様の平坦面の確認はできたものの攪乱が著しかった。墳端部分は10・11年度の調査ではラインを検出することはできず、根石の確認も出来なかった。この他、前方部には前方部前面の中位から墳端にかけて5Eを、前方部西側の墳端に5Fを設定し、5Eでは一段目斜面葺石と墳端を確認しているが根石は確認されていない。

周堤確認のために設定した5H-2、5Iでは地山整形によって周堤が構築されており、基底部幅4.4m~5.0m、高さ0.55~0.75mを測る。

2. 平成12年度の調査結果

今回の調査は前方部東側、前方部西側、後円部南西側の3箇所で面的に行った。

5II区は主軸以東の前方部に設定した調査区で、5C、5D間を繋ぐ形で、現況墳頂から墳端外の削平される部分まで設定した。中間でセクション確認のためのベルトを東西方向に設定し、北側を5IIa、南側を5IIbと名付けた。墳端確認と墳丘形態確認のための調査である。

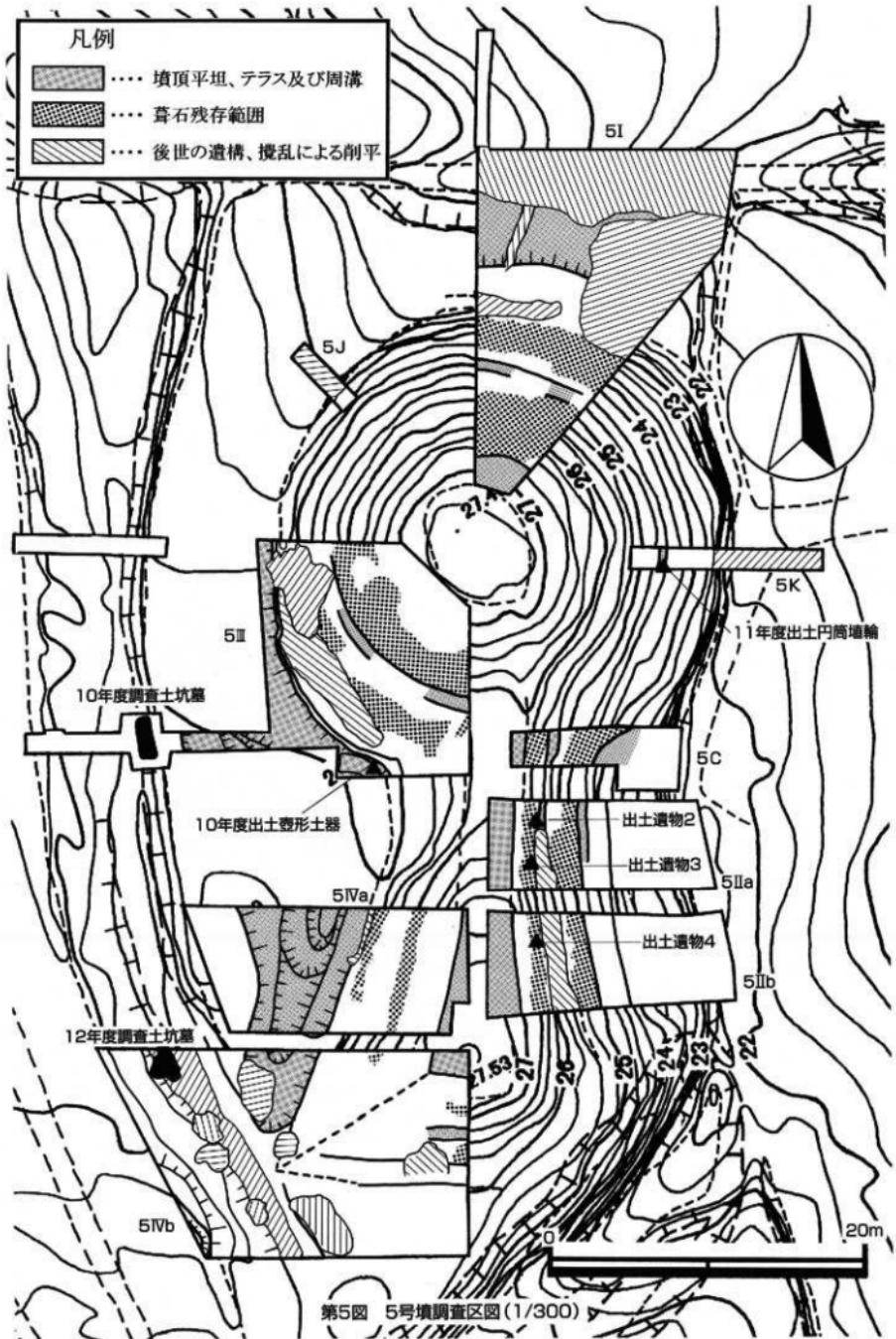
調査の結果、墳丘一段目、二段目斜面の葺石が確認された。墳丘傾斜は隅角側からくびれ部にいくに従い緩やかになる。それぞれの端部では根石と思われる直径20cmの円礫を配した石列が一部で認められた。テラスは5IIaの北側の一部で検出されたのみで、それ以外のテラス部分はスコリア混入黒色土を埋土とする溝状造構によって削平されている。溝状造構は二段目裾付近から掘り込まれ、一段目斜面を大きく削っているものと考えられる。この溝状造構はテラスが残存する調査区北壁、調査区南壁でも確認されることから、前方部東側全体に巡っていたものと考えられる。

墳端部分は5IIaの北壁から南に4.0m間で盛土整形による基壇が確認された。基底部幅2.0mを測り、一段目裾から0.8m幅でテラス状になる。遺物は二段目斜面から集中して出土しており、埴輪片が3箇所で集中して見られ、うち2箇所は個体確認できる状態で出土している。墳頂部では埴輪を樹立した痕跡は確認できなかった。

5III区は主軸以西の主軸に直行する後円部(5H)とくびれ部間(5G)を繋ぐ形で、現況の墳頂平坦面から墳端のやや外側までを面的に調査した。



図版9 5II 前方部側面(南東から)



調査の結果、墳丘一段目、二段目斜面の葺石が確認された。墳頂平坦面は確認されなかった。二段目斜面葺石は比較的良好な状態で残存しており、端部では根石と思われる直径20~30cmの円礫を横位に配した石列が認められた。また、斜面に対し、縦方向に区角列石も3箇所ほどで確認でき、その間には丁寧に5~10cm程の円礫を充填している。二段目墳端からは幅60~80cmのテラスが見られる。一段目の葺石は、二段目同様丁寧な葺き方が見られるが、後世に掘られた溝状遺構と攪乱により大きく削平され、明確な墳端も確認できない。溝は幅1.1~2.3mを測る。

また、推定墳端ラインの外側では5Gでも確認された基壇状遺構が確認され、基底部幅0.5m、高さ15cmを測る。5III区では遺物は土師器、須恵器の破片が二段目斜面、テラス部分から数点出土したのみである。

5IV区は主軸以西前方部2/3、周溝、周堤を面的な調査を行った。中間でセクション確認のためのベルトを東西方向に設定し、北側を5IVa、南側を5IVbと名付けた。

調査の結果、墳丘では墳丘一段目、二段目斜面の葺石が確認された。墳頂部から隅角に至る部分では葺石の残存は認められない。前方部西側側面は一段目、二段目間のテラスは確認できなかった。しかし、二段目の葺石の残存状況から他の部位とは違う墳丘形態をもつ可能性が考えられる。二段目の葺石は比較的残存が良く、端部に根石と思われる直径20cm程の円礫を横位に配した石列が認められたが、その石列が隅角側から後円部側に向かって大きく下る状況が見られた。一段目は墳端部分を幅0.6m、深さ25cmを測る溝状遺構(セクションで確認)によって削平されているため、根石を認めることはできなかったが、やはり、二段目と同様の状況になると考えられる。前方部前面では葺石の残存が悪く、主軸ラインの一部で確認できたのみである。テラスについても主軸ラインの一部での検出である。また、前方部前面では基壇が確認された。基底部幅0.7mを測る。基壇は西側隅角にいくに従い、隆起が少なくなる。前方部西側側面の墳端では基壇は確認できない。隅角付近は墳丘の残存が悪く、明確な墳端を確認できなかったが、5号墳西側に控える周堤に接して隅角は収められると推測される。



図版10 5III後円部(南西より)



図版11 5IVa前方部側面(南西より)

前方部西側側面では周溝が確認された。隅角付近から確認でき、前方部側面に平行に構築されるが、5IVaの途中から外側に開く。底面は隅角側から後円部に向かって下っており、途中数箇所で傾斜変換が見られる。最大幅12.0mを測る。前方部前面では周溝は確認されなかった。

5IVbでは周堤の調査も行った。調査の結果、最大幅6.0mを測る周堤が確認され、その西側では3号墳の周溝が確認された。3号墳の周溝についての全容は不明であるが、隅角から後円部方向に向かって下る傾向にある。また、調査区西側壁の一部では地山整形の隆起が確認されたが、性格については今回の調査では明らかにすることはできなかった。

周堤北側では地下式横穴墓状の土坑墓が確認された。土坑墓は周堤の高まりを利用して構築され、3号墳周溝側に羨道があり、5号墳に向かって玄室を持ち、天井は崩落しているが形態を良く残す。地下式横穴墓に通常見られる豊坑が全く見られない。玄室に向かい一段の傾斜変換を持って下る羨道は、幅1.3m、長さ0.9mを測る。玄室は周堤に平行する長方形プランに近い平入りを採用し、幅2.3m、奥行0.8m、天井までの高さは現存で72cmを測る。遺物が玄室中央の床面から僅かに浮いた状態で長頸瓶が出土している。羨道は3号墳周溝の堆積土中での検出である。



図版12 土坑墓(北西より)

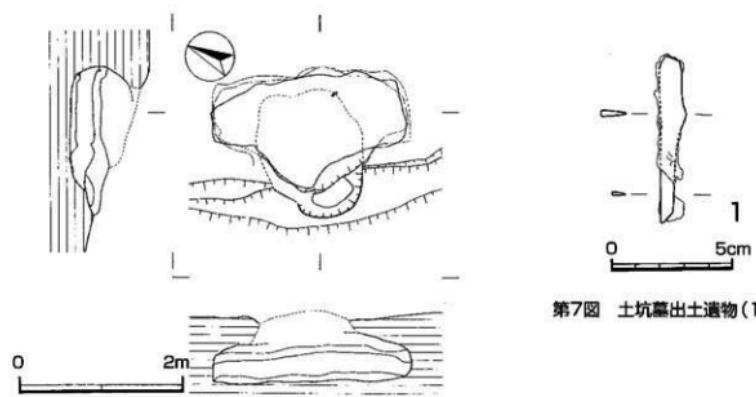
3.まとめ

今回の5号墳の調査での埴輪のほとんどは前方部東側二段目斜面に見られ、埴輪片が3箇所で集中していた。うち2箇所は個体確認のできる状態で出土している(2,3)。

出土遺物2は、円筒形埴輪である。プロボーションに歪みがみられるが、全体にエンタシス状の胴部を持つ。口縁端部は僅かに面を持つ。口縁部径は推定で28.4cmを測る。調整は内外面ともに縦、斜方向にハケの後、ナデで、一部に赤彩が見られ、残存部分下位には横方向に刻む線刻がある。突帯、穿孔は持たない。

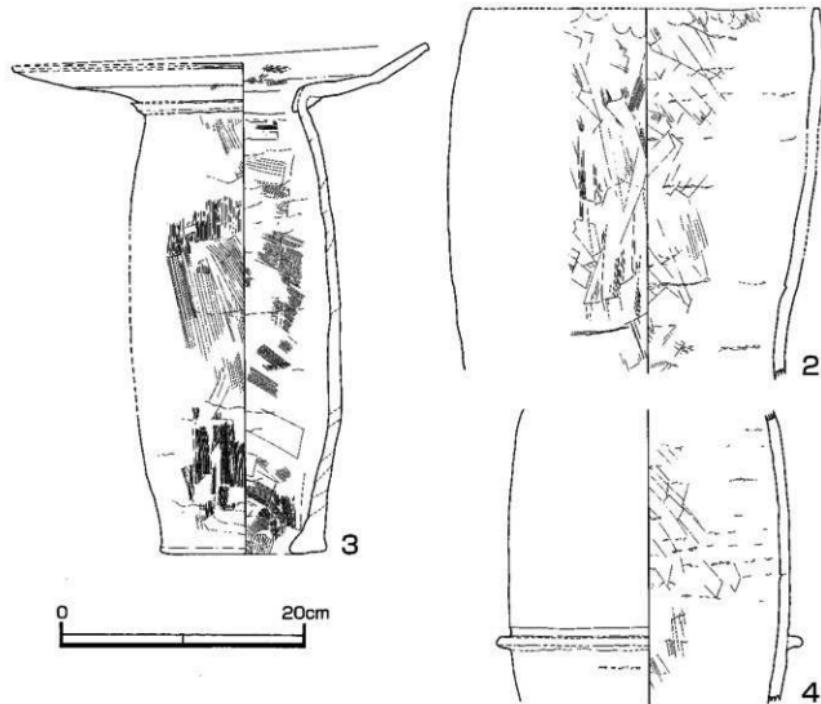
出土遺物3は、エンタシス状の胴部を持ち、口縁部は著しく外反し、中位に一段の稜を持つ。胴部と口縁部の境には台形様の突帯が巡るが、胴部には突帯、穿孔は見られない。底部は内側に向けて肥厚する。胴部外面は縦方向のハケのうちに、ナデで、内面は横、斜方向にハケを施し、口縁部内面、胴部に赤彩が見られ、黒斑が確認できる。

出土遺物4は、胴部のみの残存で、やはりエンタシス状の胴部を持つ。一条の丸みを帯びる台形様の突帯を巡らすが、穿孔を持たない。突帶上位の貼付け部には沈線を施す。内外面ともにハケの後、ナデで、黒斑が確認できる。



第6図 土坑墓実測図(1/60)

第7図 土坑墓出土遺物(1/1)



第8図 5号墳出土埴輪(1/4)

11年度の出土遺物に引き続き、今年度もエンタシス状の肩部、2次調整がナデ、突帯、穿孔を持たないなど、特徴のある埴輪が出土した。特に出土遺物3は独自の器形を呈している。これらの埴輪は2次調整にナデを施す点、出土遺物4の突帯の貼付け部に沈線を巡らす点、円筒埴輪と壺形土器(10年度出土)を共用する点では有馬義人氏の想定する日向1期(前方後円墳集成編年5期)に共通する点が見られるが、墳丘の調査結果の平面形からは、前方後円墳集成編年の3期、4期に遡ることも考えられる。

これらの埴輪は二段目斜面から出土しているため、墳頂平坦面に樹立したもののが転落したと考えられるが、墳頂平坦面ではこれらを樹立するための掘り方は確認されなかった。埴輪を固定せずに樹立したとも想定されるが、その方法については今後の調査結果を待ちたい。また出土遺物の分布状況で注目できるものとして、主軸以西では以東に比べ、埴輪、土師器の出土量が著しく少なく、それも碎片がほとんどである。個体の確認できるものは、10年度調査でくびれ部墳端付近から出土した壺形土器のみである。このことから、墳丘東側のみで埴輪の樹立を行ったことが考えられるが、実際の樹立の状況が確認されていないため、想定のみで留めておきたい。

墳丘部分では後円部のみでなく、前方部においても基壇を新たに確認した。基壇は、前方部東側で、他に比べて、高くなっていることは古墳築造時に西から東に下る地形上に構築したためと考えられるが、後円部北側に設定した5I区の墳端付近は後世の遭構による擾乱が著しく、基壇の高さ0.3mと11年度調査では報告したが、古墳築造当時の基壇はもっと顕著に見られたと考えられる。また、前方部西側では墳端付近に後世の溝状遭構が巡るため、基壇の有無確認ができなかつたが、今後の調査結果を待ちたい。今回は墳丘西側で初めて周溝、周堤の面的な調査を行った。その結果、周溝は墳丘に即したプランを呈するが、周堤は違うラインを探っている。このことから、周堤は5号墳には付設しないと考えられ、西側に競かえる周堤は3号墳のみに付設したものと考えられる。3号墳東側周堤は5号墳以北で幅約15m、5号墳周辺では4.4~5.5mと狭くなっている、この幅の縮小は、5号墳構築の際に3号墳周堤を大きく削った結果によるものと考えられる。

また、今回も周堤の高まりを利用して地下式横穴式の土坑墓が確認された。出土遺物の長頸鐵は現存で全長7.0cm、刃長2.8cm、刃幅0.7cmを測るが、身の部分の断面が刃部様になるため全体が刃部のみの残存の可能性もある。時期については遺物の残存が悪いため、判断が難しいが5世紀後葉以降と考えられる。そうした場合、前方後円墳集成5期以前に想定した5号墳、また土坑墓の羨道を3号墳の周溝の堆積土中から構築していることなどからこの土坑墓はそれぞれの高塚墳には付随せず単独で存在したとも考えられる。この3号墳東側周堤上では地下式横穴墓1基、二段掘りの土坑墓1基が確認されているが、これらも時期判断は難しい。

【参考文献】

- 発表資料 有馬義人 2000 「宮崎県の埴輪—その導入と展開」『九州の埴輪その変遷と地域性—壺形埴輪・円筒埴輪・形象埴輪・石製表飾一』 第3回九州前方後円墳研究会
発表資料 和田理啓 2001 「日向の地下式横穴」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』 第4回九州前方後円墳研究会



図版13 5IVa前方部側面(東より)



図版14 5IVb前方部側面(東より)



図版15 5IVb後内部(南東より)



図版16 5IVb後内部二段目



図版17 5IVb前方部前面(南より)



図版18 5IV周堤(南より)



圖版19 土坑墓遺物出土狀況



圖版20 墓輪出土狀況(遺物2)



圖版21 墓輪出土狀況(遺物3)



圖版22 出土遺物(2)



圖版23 出土遺物(3)



圖版24 出土遺物(3)

第IV章 7号墳の調査

1.古墳の概要と平成11年度の調査の状況

3号墳前方部南側、台地縁辺部に位置する前方後円墳である。古墳は西から東へ下る傾斜地に立地し、主軸を東西方向に持つ。古墳の後円部、北側、東側周溝を堀割状に造られている道によって大きく削られている。古墳の規模は現況で墳長46m、後円部径24m、高さ3.9m、前方部幅24m、高さ4.4m、前方部長22m、くびれ部幅16mを測る。墳丘両側面には、幅3~15m程度の周溝が巡り、現況では前方部前面側は不明となっている。また、後円部南側周溝内には島状の高まりが見られる。

調査前は周辺に雑木が繁茂していたが、調査に伴い、墳丘上、周溝内の樹木はすべて伐採した。

10年度の調査は前方部築造状況確認のために墳頂部から墳端にかけて主軸ラインに平行にトレンチを設定した(7A)。調査の結果、葺石の残存することは確認されたものの、調査期間の制約があったため段築の確認、墳端の確認に至らなかった。しかし、墳端部分については覆土が現段階で150cm堆積しており、現況の平面図で確認できるラインより西側に広がる可能性が考えられ、7号墳西側の畠地を開墾する際に畠地を拡げるため7号墳前方部前面まで土盛したのではないかと考えられる。



図版25 7号墳(南西より)

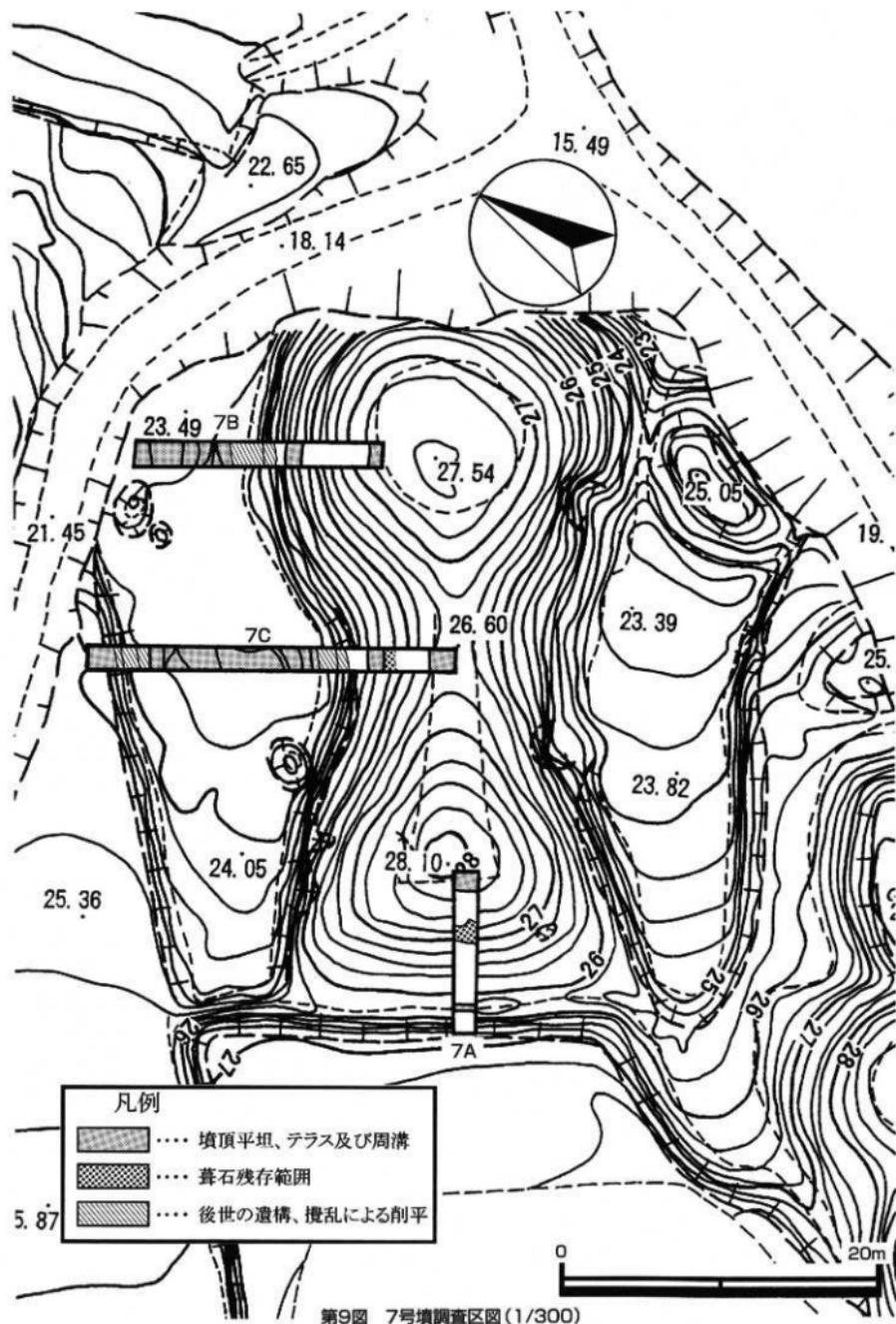
2.平成12年度の調査結果

今回の調査は後円部北側、くびれ部北側付近に2本のトレンチを設定した。

7Bは主軸に直行する後円部北側に墳頂から墳端、周溝の掘削される部分まで設定した。後円部築造状況確認と周溝形態確認のための調査区である。調査の結果、後円部は二段築成であることが確認され、25.0m付近でテラスが巡る。葺石はテラス付近に転落石が見られることから葺いていたとは考えられるが、残存はしていなかった。一段目は斜面中位以下は削平されており、墳端の検出もできなかった。周溝は著しく土壤の堆積が見られる。底面は、良好な状態でパックされているが、周溝



図版26 7B(北より)



第9図 7号墳調査区図(1/300)

の外側立上りは堀割状に造られる道によって削平されている。周溝最深部付近の底面からは土師器の高坏、須恵器の甕、坏身等の破片が比較的まとまった状態で出土している。

7Cは主軸に直行するくびれ部からやや前方部寄りに墳頂から墳端、外側の周溝の立ち上りまで設定した。調査の結果、前方部も2段築成であることが確認され、25.2m付近でテラスが巡る。葺石は二段目においてのみ残存するが状態は悪い。一段目は後円部と同様に斜面中位以下の削平が著しく、墳端の検出はできなかった。周溝は墳丘側を除けば良好な状態で残存しており、現況墳端からの幅は9.0mになる。周溝は墳丘側からは緩やかに下り、外側立上り付近が最深部になり、その後高さ1.5mで著しく立上る。周溝の深さは推定墳端から約50cmを測る。また最深部付近では南北方向に長軸を持つ土坑を検出した。土坑のプランはトレーナー幅の両側にかかっているため全様は不明であるが、1箇所において角を確認することができることから、土坑墓の可能性も考えられる。この遺構についてはトレーナー両側を13年度以降拡張予定であるため、プラン確認後に掘り下げを考えている。



図版27 7C(北より)

3.まとめ

今回の調査では前方部、後円部共に2段築成で、25.0m付近でテラスがめぐることが確認された。また、二段目では葺石を葺くことを確認したが、一段目については不明である。しかし、周溝内においても転落石が著しく少ないとから、一段目には築造当時から葺石が葺かれていない可能性も考えられる。周溝部分は最深部は外側にあることが確認された。周溝外側は垂直高で1.5m立上がるが、周堤を構成するような盛土等は確認されなかった。

しかし、今回は周堤が予想される位置での調査面積の制限があったため、周堤の有無については、

保留にしておきたい。また、7Cの周溝最深部で確認された土坑は、周溝内に土壤堆積以前に構築されていることから7号墳と同時期かそれ以前のものと判断できる。ただし、7号墳以前と判断した場合、仮に、アカホヤ火山灰上面からの掘り方であれば、深さ150cm以上を測る。7Bでは周溝最深部の底面から土師器の高坏、須恵器の甕、坏身等の破片が集中して出土している。遺物は墳丘に近い部分では全く出土しておらず、墳丘から転落した遺物とは考えにくい。



図版28 7C葺石検出状況

そのため、造出や周堤などからの転落が予想されるが、今後の調査結果を待ちたい。13年度は7B西側を拡張予定であるため、遺物の取り上げはそれ以降となる。そのため、具体的な時期設定は控えるが、現段階では概ねTK23段階前後と判断される。



図版29 7Bトレンチ(墳丘より)



図版30 7C周溝(墳丘より)



図版31 7B遺物出土状況①



図版32 7B遺物出土状況②



図版33 7C周溝内土坑検出状況



图版34 5号填空撮



图版35 7号填空撮

報告書抄録

ふりがな	しせき いきめこふんぐん						
書名	史跡 生目古墳群						
副書名	保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅲ						
巻次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第52集						
編著者名	福岡洋道						
編集機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橘通東1丁目14番20号 TEL(0985)25-2111						
発行年月日	2002年3月31日						
所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
生目古墳群	みやざきけん みやざき し 宮崎県宮崎市 おおあざとえ 大字跡江	45201	31° 56' 54"	131° 23' 15"	19991213 付 近	1,600 付 近 20000331	保存整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
生目古墳群	古墳群	古墳時代	旧14号墳-溝状遺構	須恵器			
			5号墳-葺石、墓壇、周溝	埴輪			
			7号墳-葺石、周溝	土師器-高壙 須恵器-甕、坏身			
		中世以降	溝状遺構 (5Ⅱa、5Ⅱb、 5Ⅲ)				

史跡 生目古墳群

保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅲ

2002年3月

発行 宮崎市教育委員会